
THE BUG

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE BUG

【Nコード】

N3524E

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

これは蟲の話だ。この物語はあなたに読ませるために書いてはいるが、その実あなたの中に棲む蟲に語りかけるための話だ

序文／冷たい雨

これはとても不愉快な話だ。

これはとても不愉快な話だ。自分がただの虫籠いむのにすぎないという事実は、とてもとても胸クソの悪くなる話だ。

この話はあなたに読んでもらうために書いてはいるが、その実、あなたそのものにはなにも伝わらないようになっていく。これは蟲の話だ、いや、正確に言うなら、蟲に語りかけるための話だ。あなたはきつと嫌がるだろうが、これはあなたの中うちにいる蟲に向かつてあなたを通して語りかける為に書かれた話だ。

この話を読むのはやめた方がいい、この話はきつとあなたの中の蟲を活性化させる。この話はきつとあなたの中に棲すむ蟲を活性化させる。

冷たい雨

雨の日は嫌いだ。

それは、たつたそれだけの行為だった。雨が上がったばかりの街の中、たたまれた安物の傘の先端を地面から、わずかに百二十度、上に傾ける。他人の事を考えない輩やっなら一無意識的（ふつう）にやる動作だ。

それからかつきり三時間後、男そいつはこの世とは別などっかへ行っていた。

それは、彼にとつてはささいな行為だったかもしれない。しかし男かれにとつては脅威きょうい的な行為だった。安物の傘の尖った金属の先端が

序文／冷たい雨（後書き）

本作品はフィクションであり、実在の団体や人物等とは全くの無関係です。また、不適切な表現が混じっている場合がありますが、表
現上の演出とご理解頂きたく存じます。

再会 その1

「たとえばだ、それは死ぬっていう事実を知ったその時に似ている。結局無くなるというのになぜ自分たちは生まれて来てしまったのかという理不尽、その中で惰性のように生きている。そんな感じに似ている」

それは、奇妙な信頼関係だった。

男は口笛を吹いていた。なんの曲目かは知らないが、やたらと軽快で、人生は喜びに満ちあふれているかのような雰囲気だった。この重厚な、圧倒されそうな雰囲気の中、よくそんなものをくちずさむことができるものだ。

男は特殊強化プラスチックという箱ゲージの中で身じろぎ一つせずに座っていた。人を小馬鹿にしたような皮肉げな微笑えみを浮かべ、尊大に見えるように足を組み、じっとこちらを伺っている。

ここにいるのは別人だ。自分が尊敬、というよりは心酔していた岡本幹彦おかもとみきひこはこれではない。彼はこんな下卑た微笑みが似合うような男ではなかったし、こんな人を見下したような視線など持ち合わせではないなかった。

あの人は常に正義とは何かを悩み続けていた。そんな人だったはずだ。落ち着け新城篤史しんじょうあつしと自分に言い聞かせながら、彼は内心のいらだちを隠せないでいた。

「別段、僕は微塵も変わっていない」檻ケージの中のその男は、彼を見ようともせずそう言った。

「世界の在り様は、観察者に依る」その声は、聖職者のように心のすべてを見透かすかのようだった。

「どう、いう事ですか、先輩」

「『世界は優しいと勘違いできるほどには残酷で、その残酷さを気づかせない程度には優しい』そう言って彼女、高島 法子は消えた」

再会 その2

「だから、どういう事なんですか、先輩」

「だから、それが、どうしたというんだ、新城篤志」

そう言って、ようやく彼は振り向いた。その眼差しはとても優しく、これがあの岡本幹彦では無いという錯覚すら産んでしまう。――囁く者（ウイSPA）、岡本^{おかもと}幹彦^{みきひこ}

「波紋、…踏み出すその一歩さえ、人の生死と無関係ではいられない。人はただ、生きていけるといっただけで何かを殺し続けている生き物だ。それを能動的にやるか、やらないかでこんなにも違ってしまっ、いや、違いられてしまっ」静寂の中、響くその声は神託のようにも聞こえるほどに荘厳ではあった。

「僕は貴男の哲学^{いっしやく}を聞きに来たわけではない」飲み込まれないように、そう言った。

「そうか、ではそろそろ君の知りたい事に答えようか、起点^{はじまり}はここで、終点^{おわり}がたまたまそこだっただけの話だ。…腕を組むというのは、内心のガードが堅くなっている印だっとな、新城篤史」

知らないうちに自分はそうしていたようだ。

「人の心の中には多かれ少なかれ悪い蟲^{むし}がいてな、ふとしたきつかけで、それが顔を出す。ま、普段はやつらはたいしたしたことなどでははしない。理性や常識や本能とかいったもので押さえられているしな。しかし、それにちよいと方向性と意志を持たせてやるんだ。

簡単に言えば“誘蛾灯”のようなものだ。しきりに首筋をさすっているな。息苦しい話かい？ 新城篤史」

「…、先輩ッ！？」「信じられない体験、自分の首を絞める自分の右手

「そう、その起点は、ここだ、ただの言葉さえ使いようによっては、凶器足り得る。ようこそ蟲達のざわめくこの世界へ、新城篤史」

奇妙な時計 1

それは、奇妙な時計だった。透明な球体の中に閉じこめられた文字盤と針、その球体をどういふふうメイカーに動かしても、文字盤と針は、必ず自身の方向を向く、どこメイカーの製造者のものでもなく、ただ、それを造るのに技術の粋が集められていることだけがわかった。

それは、どうやって動いているのか、それは、どのようにして動いているのか、それを考えるだけで、一日が過ぎていった。それは、子供の頃のキラキラとした宝物だった。

”ストレンジ・クロック奇妙な時計” それは、忘れていた宝物だった。忘れ去られた宝物の**はず**だった。

その時まででは

*

それは、奇妙な時計だった。子供の時も不思議だったが、大人になつてしまった彼女が見て見てもそれは、不思議な時計だった。

そして、変わらず時を刻み続けるそれをバッグの中にしまい込んだ。

そうして、それは唐突にやって来た。まさにタイミング良く、自分の都合の良いように、それは唐突にやって来た。

やる事は簡単、ほんの少しそこに手を伸ばして、それをやれば良い。止められた時間の中でそれをやれば良いのだ。

*

それは、奇妙な女だった。

某有名企業の制服を身につけ、同僚と談笑しているが、明らかにその女は異質だった。なにが、というわけではない。それは、どんな風景にも溶け込めない、そういう女だった。

誘うように”ストレンジ・クロック
ルーチン・ワーク奇妙な時計”が、光を反射する。そうして、彼女は、日常になった決まり切った行動を誘われるままに行うだけだ。いや、そのはずだった。彼女しか動けないその世界でそいつが言葉を発するまでは

「世界には唐突に”かんせい陥穽”が、生じる事がある。それは、非常に唐突で、気まぐれに、それは訪れる。それに、気づくか、気づかないか、それが問題だ」

”それは奇妙な男だった”
それは慈しむような、哀れむような、複雑な表情を浮かべて、言葉を続けた。

「そう、世界はこんなにも穴だらけだ」

奇妙な時計 2

「…何故？ その質問を君がするのか、自分だけだと思っていたのならそれははなはだ失礼な思い上がりというものだ」

無言がその問いを肯定していた

「奇妙な時計”それが君の”カタチ”か」

「初めては、どんな気分だった。高揚したか、怯えたか、それとも感動でもしたのかな、自分が選ばれたのかもしれないという事実に近づいてくる男に、女はその奇妙な時計をお護りのように握りしめた。

「これは、必要な邂逅だ。^{てじゅん}だから、なにも怯える必要は無い。そう、君には僕が必要で、僕には君が必要なのだから」

「だが、その関係を構築する為には代償が必要だ。なにかを手に入れるのにはそれに見合った代償が必要だろう」

覆い被さる影から、恥も外聞も無く、女は、そこから逃亡した。

「やれやれ、逃亡は無駄だと言うことは、自身が一番知っているだろうに」

じつくりと獲物を齧る時間を堪能し男は言った。

「そう、その目が良い。もはや逃がれられない自分の運命を理解したその目だ良い。幾人が君の前でその瞳をさらしたのかは知らない、

しかし、悲鳴を上げないというのは美德だ。ここから先は、才能の問題だ」

男との距離が近づき、男の腕が伸ばされ、その無骨な指先が、その切りそろえられた爪先が、ずぶずぶずぶとその瞳に突き刺さる、祈るように両手を差しだし、そうして、彼女は歓喜いたみとともに気づいてしまった。自身が選ばれた事に、そうして彼女は自身の神に出逢ってしまった。

ずづづつと、ずづづつと思っていたのだ、この才能は、こんな、自身の都合の為だけに使われるだけのものでは無いと。

すれえいんじ・くろつく・わーく

「ここから先、あなたに何が起ころうと私達は一切関知致しません」
「わかっている」

「確かに彼は自分の意志でここにいますが、だからと言ってその事自体が何の安全を保証しない事を…」

「わかっている」

「それから…」

「お役目、ご苦労だが、三度目だ。わかっている」

一瞬の逡巡の後、規定ですからと言って同じ言葉を彼女は繰り返した。

いつもの繰り返し返された>！R<会話(こう>！<い)、いつものように決められた手順、それを行うモノが変わったとして、その差異に彼は、気づかなかつた。

そうして、彼は見落としてしまった。彼女がそこに居たという事実に、注意深く観察していれば、その言葉を告げた者がいつもの男ではなく入れ替わった彼女だという事に気づいたかもしれない。

その瞳を少しでも見ていれば、その瞳が人の眼としては異常であることに気づいていただろう。

彼ならば、気づいたはずだ、その瞳に浮かぶ、奇妙な時計の文字

盤のようなものが刻まれていた事に。

その奇妙すどれえいんじ・くろつくな時計は、彼女の眼窩にいつそ見事な程に填り込んでいた。そして彼女は、自身の能力を発動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524e/>

THE BUG

2011年12月21日22時49分発行